

最後の代紋

黄原はどこへ

「黄原はまだ見つからんのか?!」

頂上作戦の指揮官がいら立った声を上げた。

村崎會内部の親大亜門戸会派と反大亜門戸会派への分裂と、それが波及することによる全国の暴力団の勢力争いに乗じ、警察では警視庁から全国の府警や県警までを連携して『頂上作戦』と称する、全国暴力団一斉撲滅計画を練っており、警察への協力を約束した黄原は、この作戦のキーパーソンとされていた。

そして、この頂上作戦に付帯して警察内部でも極少数の関係者しか関与していない秘密作戦が計画されていた。

それは、警察内部での暴力団との癒着を一掃する腐敗一掃作戦であった。

「特に緑川のヤツ、S市で目高組を解散に持ち込んだ功績により、その後トントン拍子に出世して、今では本庁の重要ポストに就くまでになり、将来警察庁長官も夢では無いと噂されている。しかし、目高組の解散には謎が多すぎる・・・偶々交通検問中に武器を所持した目高組組員を検挙したことが発端になっているが、大亜門戸会と組んで目高組潰しをしたと考える方がスジが通る・・・その後、陰に陽に大亜門戸会の肩を持って捜査に圧力を加えやがったお陰で大亜門戸会がこんなに大きくなってしまった・・・黄原の協力が在れば、緑川や腐敗警官どもを一掃できたはずなのに・・・」

独り言の様に忌々し気に口にした。

しかしその肝心の黄原は、厳重な警察の監視の目をすり抜けて逃走し、あろうことか一人で大亜門戸会を粉砕してしまったので、頂上作戦の指揮官は憤懣やる方なかった。

「はい・・・何しろ死者や重傷者が多すぎます。それに消防や警察や何やらで混乱する現場から逃げ出した者も大勢おりまして、果たして黄原がこの現場から逃走した者の中に入っていたのか、あるいは死者や重傷者の中に入っているのかもまだ判りません」

副官が申し訳なさそうに答えた。

「現在までに判明している主要な死傷者については・・・」

と、手にした資料を読み上げ始めた。

「先ず事務棟と本館を連絡する地下通路で発見された二人について、二つ龍のお竜こと鮫島

常子一死因は刀傷による出血死。鮫島と並んで無職で元懲役囚の島哲夫が発見されており、こちらは銃傷による出血死でした。地下トンネルには火が回っておらず、確認は比較的容易でしたが、他はひどく焼損しており確認には時間が掛かっています。

本館で発見された死傷者については、市内金融業の沢田仁、眉間を拳銃で打ち抜かれており即死したものと思われます。それと、肝心の剛沢敦志こと長谷川誠。彼は焼死ですが両手両足を拳銃で打ち抜かれており、逃げることも出来ず、火に巻かれたものと思われます。

剛沢の傍で富山銀子の死体が発見されています。彼女は銃傷による出血死。剛沢を撃った銃と同じものが使われた様です。彼女は、元は黄原の情婦でしたが、黄原が服役中に剛沢に乗り換えた様です。それと鑑識から大変興味深い事実が上がっています・・・」

と、言う意味深に口の端に淫猥な微笑を浮かべた。

「鑑定の結果、彼女の体内から黄原の体液が検出されています。」

「自分を裏切った女を報復のため射殺して、死姦した一と、いう事か・・・何という愚劣な男だ！」

と、苦々し気に口にした。

「しかし・・・黄原という男も大した者ですな・・・たった一人で三百人から兵隊のいる大亜門戸会をブッ潰してしまったんですから・・・」

「お陰で、頂上作戦もブッ潰されてしまったよ！」

と、治まらない怒り声を発した。

「しかし、出所してから間が無い黄原に一人であれだけの武器が集められる筈が無い。誰か黄原に武器を提供した者が居たはずだ・・・」

「大亜門戸会が潰れて一番得をしたのは反大亜門戸会の中心であった花和組でしょう・・・次の村崎會の会長は奴で間違いないでしょう。」

「葬儀の花輪こと花和宗次か・・・これまで何人も敵対する組の親分を殺しては、太々しく葬儀に花輪を送り付けて来た恐ろしい奴だからな・・・」

大亜門戸会が突然消滅して親大亜門戸会派だった親分連中は反大亜門戸会派に詫びを入れ、戦わずして無条件降伏状態であり、今後、抗争の起きる余地は無かった。

両派の抗争に乗じて介入を計画していた警察としては当面打つ手が無かった。

「良し！分かった！適当な証拠を集めて逮捕状をとって花和宗次をパクッて来い！奴にゲロさせて作戦の練り直しだ！」

「しかし、兎にも角にも今回は死傷者が多すぎますよ・・・ビルの瓦礫の下でまだ生き埋めになっている者や肉片だけになってしまった者も多く、死傷者の確認に今後どれだけ時間が掛かるやら・・・重症者は警察病院に運んで治療中ですが、全員怪我が酷くてとても聴取を取れる状況ではありません。」

と、ここまで話して重要な事を思い出したように、「そう言えば、昨夜、重傷者の一人が警察病院から消えたとの事です。全身に酷い火傷を負っており身元は不明ですが、背格好から黄原に似ている・・・と、いう話が有ります。」

副官の報告に司令官の眉がピクッと動いた。

「ただし、あまりにも火傷が酷いため、直ちに治療を受けないと長くは生きていけないだろうと医師の話でした。」

「分った。病院周辺の変死者の情報を集めろ！」

「全く、こんな身体で儂の処に転がり込んで来おって・・・」

ベッドの上で、まるでミイラのように全身を包帯に巻かれた黄原を見下ろして和久井が呟く様に口にした。

「偶然、和久井先生の自宅が警察病院の近くで助かったぜ。」

咽に重度の火傷を負い、以前の黄原の声とは全く違う掠れた声で応えた。

「偶々、^{たまたま}儂が家に居たから良かったようなものの、もし儂がいなければどうするつもりだったんだ？」

「大亜門戸会が潰れて失業した先生には何処も行き場が無くて、自宅に居ると思っていたぜ・・・まあ、居なければ路上でおっ死^ちんでいただろうが・・・」と、包帯に包まれた顔で笑う様に答えた。

「どこの組もお前の事を必死になって探しているぞ！儂が一言連絡すれば、殺し屋がやって来るぞ！今のお前なら小学生が来たって簡単に殺せるぞ！」

幾つも繋がったチューブの点滴のパックを交換しながら脅す様に口にした。

「和久井先生は俺の事を売ったりしないさ・・・」

「フン、随分と買いかぶられたものだな！」

新人紹介

此処は、かつて岡照組が建築し、銀子が強制的に客を取らされていた事のある秘密のソープの在るビルである。その後、数奇な運命により、目高組に経営権が渡り、目高組に勝利した大亜門戸会が手中に収めたビルであった。

何代も持ち主は変遷していたが、その施設を利用して、好色の金満家に女体を提供するという事業は継続していた。

以前は目高組の下部組織に属していた黒川組であったが、目高組の敗北後、機敏に立ち回って、剛沢から杯を受け大亜門戸会の下部組織に鞍替えしていた。

黒川の売春業の運営能力を認めた剛沢は、暁美やお竜達を酷使した大亜門戸会本部での性接待を除く、大亜門戸会手持ちの全ての売春施設の運営を黒川に一任した経緯があった。

今回の大亜門戸会の崩壊により、このビルも黒川の手には棚ボタ式に落ちて来た訳であった。

ビルの中に設けられたホールの中に、この売春施設の中で働かされている女達が集められていた。

女達は何も下着を着けていない素肌の上に、ピンク色のタオル地のガウンだけを纏って、並べられたパイプ椅子に腰を降ろしていた。

女達に交じって最前列の椅子には、この施設の管理と女達の性技指導を任された内田と山崎や、遣手^{やりてばあ}婆の皐月と菖蒲の双子姉妹の姿も見られた。

ここに集められた娼婦達はこれから何が始まるのかと、ひそひそと隣同士で囁き合っていた。

「待たせたな、今日此処に集まってもらったのは他でもねえ・・・」

前方の扉を開いて、肥満した達磨の様な身体を窮屈にスーツに押し込んだ黒川が姿を現した。

「今日は、新入りを紹介しようと思ってな・・・おい！連れて来な！」

扉の外に控える子分に声を掛けた。

子分に鎖を引かれて、四人の女が前屈みとなって、よろよろと脚を^{もつ}縄れさせながら待ち受ける人達の前に引き出されて来た。

集められた娼婦達が一瞬息を呑んだ。

四人は全員全裸で、軽く後ろ手に縛られ、首には革のベルトが巻かれ、子分の引く鎖は、その首輪に通されており、四人一列に数珠繋ぎにされ、観衆の前に引きずり出されて来たのだった。

先頭はムッチリと熟れた肉感的な肉体を持つ美貌の中年女であり、後の三人はまだ高校生くらいに見える幼げの残る少女たちであった。

後ろ手錠を掛けられているため、前屈みになって、大腿をモジモジと擦り合わせながら内股歩きしても、恥ずかしい処を隠すことは出来ず、むっとするような濃密な茂みやその奥が覗けそうな儚い春草が隠しようも無く衆目の前に晒されていた。

「これは・・・これは・・・」内田が驚いて目を見開いたまま呟く様に口にした。

大亜門戸会の本部を訪れた事のある内田と山崎と遣手姉妹は、それが剛沢の愛人の亜紀の落剥した姿だと分ったのだった。

「剛沢親分の愛人の亜紀姐さんじゃないか・・・」

かつては、剛沢の傍に侍り女帝然とした尊大な態度で接していた亜紀の裸身を呆けたように見つめて声を上げた。

「そうさ、此女奴らは剛沢の長年の筆頭愛人だった亜紀とその娘達さ！」

黒川が肥満した身体を揺すって笑いながら自慢げに応えた。

大亜門戸会による軛くびきが無くなった今、自分の権威を殊更ことさらに誇示するように‘剛沢’と、かつて平身低頭して仕えていた男を呼び捨てにした。

居並ぶ女達の間でザワザワと囁き合う声が聞こえ、この女が自分達を無理やり客と交合わせて脂汗を流して得た金を無慈悲に収奪して行く大ボスの愛人かと思うと敵意の籠った眼で亜紀を見詰めた。

一方、内田と山崎の目線は、最初の驚きから次第に女の価値を値踏みする女衒ぜげんとしての冷たく粘っこいモノに変わって行った。

女達の怨念の籠もった憎悪の視線と女衒たちの蛇の様な冷たい陰湿な視線を浴びせられる中、立ち竦む女達は青くなったり赤くなったりした。

「此女奴らは、今日からお前達の仲間だ！まあ仲良くしてやってくれ！」

黒川が満面に笑みを浮かべて喋った。

「それじゃ、私あつしが腕に縊りをかけて男殺しのテクニックを仕込んでやりまさあ！」

剛沢の愛人や可愛がっていた娘達を調教できると、喜んだ女体調教係の山崎が腕まくりして声を上げた。

「山崎、残念ながら此女奴らは特 A の女だ！此女奴らの調教係は別に呼んである。」

始めて耳にする特 A と云う言葉に驚いたように問い掛けた。

「ところで、特 A って何ですか？」

「今度から新しく作るんだ！別に特 A でもプラチナクラスでも呼び名はいつでも良いんだが・・・とにかく今、内の売春組織は、皐月と菖蒲の管理する安サラーマンなんかを相手にする売春宿・・・これを B クラスとしよう。そして、内田と山崎が管理するこの高級会員制ソープ・・・これが A クラスだ！この会員制ソープはそれなりにリッチで社会的信用の在る人しか会員に成れないが、今回、大亜門戸会の崩壊で曉美やお竜達が相手にしていた超リッチな闇の世界の客達の受け皿が無くなってしまった。そこで、これらのスーパーリッチな客達を呼び込もうって訳だ！この金に飽かして遊び慣れた特上客達は、在り来たりのサービスじゃ満足しねえ・・・そこで専門の教育係を新たに雇ったって訳さ。」

折角の女体調教の機会を他人に奪われて悔しそうな貌をする山崎を横目に見て、「おい！呼んで来い！」と、傍らの子分に命じた。

ヘィ！と返事してホールから飛び出した子分が暫くして、化粧っ気のない地味な服装の老女を案内して戻って来た。

顔面一杯に小皺や染みを作った初老の女が誰であるか、内田も山崎も最初は判らなかったが、ふと思い出して「綺麗囃(キララ)姐さんか！」と、驚きの声を上げた。

十年以上前の舞台の上での煌びやかな衣装とドギツイ化粧に覆われていた綺麗囃しかイメージに無かった二人は、その変わり様に思い出すのに時間が掛かってしまったのだった。

「アンタは何年か前に引退したって聞いていたぜ。」

「ああ、引退したよ。私も歳を取ってアソコも若い頃みたいには動かなくなって来てね・・・」

そんな啞然とする二人を尻目に、「此女奴ら^{こいつら}かい、私が芸を仕込むってのは？」

と、亜紀と三人の娘の前に立って、黒川の方をチラッと見て尋ねた。

「ああ、此女奴らにアンタの秘技を伝授してやって欲しいんだ。」

「秘技って言うほど大げさなモンじゃなくて、要はココを使った恥掻き芸さ！」

と、スカートの上から自分の股間を撫でながら黒川の大げさな表現に笑って返した。

そして、恐怖に張り詰めた目で綺麗囃の方を見詰める亜紀の方を振り返ると、

「亜紀姐さん、随分とお久しぶりだね。その節は色々お世話になったね。まさか剛沢の情婦^{いも}だったアンタが花電車の芸を身に付けさせられるように成るなんて夢にも思わなかったよ！」

と、麻縄で後ろ手に縛られ、恥ずかしい部分も隠すことの出来ない女の秘所をジロジロ見詰めながら揶揄う様に言った。

「アンタもそれなりの歳で、これからの修行は大変かも知れないけど、そんな事には構わないからね！容赦無くビシビシやるからその積りでいるんだね！・・・まあ、アンタは剛沢と銀子から、それなりに鍛えられているって云う話だから、昔、晴江を調教した時よりはマシかもね・・・」

コンプレックスの塊の綺囉囉は、自分より強い者にはへらへらとみっともないほど媚^{へつら}び諂^{へつら}い、弱い者には限りなく邪険に振舞う処が在ったが、その性格が現われネチネチといたぶるのであった。

怯えて俯く三人の娘の前に立つと、「アンタ達は未だ若いからモノに成るかも知れないね・・・昔アンタ達の母親を調教した事が有るんだよ。母娘二代を調教する日が来るなんて夢にも思わなかったね！」と、娘達に顔を近付け淫惨な笑顔を作った。

棘のある目で覗き込む、幾つもの皺やヒビの入った醜怪な老女の顔は、まるで物語に出て来るお姫様に毒を飲ませようとする魔法使いの老婆を連想させ、ゾッとする恐怖を覚えた。

「アンタ達は死んだ銀子から鍛えられ、後ろの穴を使って卵産みやバナナ切り位は出来る様になったそうだけど、これから覚える芸はそんな生っちょろいモンじゃないからね！」

娘達は、銀子から受けた肉体改造の色々を思い出し、恥辱的で苦痛に満ちた経験を積みされたが、それを上回る調教とはどのようなものかと震えあがった。

「早々と現場から逃げ出した百花と芽衣も居所が判ったから、ひっ捉えて連れて来るから、こちらの方も宜しく頼むぜ！」

と、黒川が口を挟んだ。

「それは、それは大入り満員だね！私も仕込み甲斐が有るってもんだよ！」と、嬉しそうに声を上げた。

百花と芽衣を捉えて来て、自分達と同じように肉奴隷にすると耳にして、剛沢に捨てられた途端、牙を剥いて自分に虐待を加えてきた二人が同じ境遇に堕とされると思うと複雑な物を感じた。

そして、黒川が以前ポロッと言ったように、この男は剛沢の元愛人達を集めた、特 A と称する売春組織を作るつもりでは無いだろうかーと、思った。

剛沢に恨みを抱く闇世界の男達は多くいるだろう。そして、剛沢無き今、その恨みが自分達の身に振り掛かって来るのでは一と、背筋に冷たいモノが走った。

「まあ、そう残念そうな貌をするな・・・綺囉囉姐さんも女だから男にしか分からないテクニ

ックの調教には、お前達も参加させてやるから・・・」

折角の美女たちを目の前にして、トンビに油揚げを攫われたような悔しそうな表情を浮かべる山崎達の顔を見ながらメンツを立てる様に口にした。

「私達は、女郎の体調管理もしているからちょっと見させて貰うよ！」

皐月と菖蒲の姉妹が前にしゃしゃり出て来た。

二人は、直立する亜紀の前にしゃがみ込むと、たつぷりと柔らかな肉を置いた大腿の狭間に鎮座するムツとするような熟女の色香を立ち昇らせる小高く盛り上がった秘丘に顔を近付けた。

「おや？アンタは顔に似合わずココの毛が薄いんだね。下の肉貝が透けて見えそうじゃないか！」と、その部分を指さしてケラケラと笑い声を上げた。

下賤な遣手女に揶揄われて、顔を赤くして首を振った。

二人は左右から手を伸ばすと、白い下腹を黒い霞の様に染める薄く柔らかな春草をサワサワと左右に掻き分け、その下地を検分した。

「随分と使い込まれている筈なのに、色素の沈着も無く綺麗な色をしているじゃないか！」

「ホントだ！それに匂も良いわ！」

双子の姉妹はイキの合った指使いで左右から亜紀の秘芯に指を添えると、薄い痴毛を掻き分け、柔壁を左右に推し広げ、奥に秘められた淫靡な佇まいを示す部分を代わる代わる覗き込んだ。

「中には此処が臭い女はいるけど、そんな女は娼婦には向かん！アンタのは良い匂いや！男を狂わす臭いを持っている。これなら娼婦の資格充分や！」

下劣な遣手婆に媚肉を検分される羞恥に秘奥が火照り、自然と漂い出した陰臭を目敏く嗅ぎ付けられた恥辱に顔を真っ赤に染めて身も世も無く左右に頭を振った。

「アンタ感じ易い体質やな？マコがジワジワと沁みて来たで！」

これまで銀子達から受けた肉体改造の効果かあるいは亜紀自身にそのような体質が秘められていたのか下劣な女二人からいたぶられる恥辱が不可思議な陶酔感を呼び起こし、本人も意識しない内に、その部分に異物を受け入れる準備のための濃厚な愛液が滲み始めていた。

ヒイ！と悲鳴の様な声が亜紀の口を突き身体をピンと仰け反らした。

皐月が左右に推し広げられた秘園に唇を押し当て、舌尖で樹液を掬い上げたのだった。

「良いお味や！」亜紀の体液の味覚を確認して、満足げに声を上げた。

本当か？と皐月が変わって菖蒲も舌尖を押し当てた。

二人の遣り手婆に秘裂を罫られる屈辱に直立する亜紀は全身を紅潮させブルブルと身体を震わせた。

二人は自分が管理している娼婦の身体の調子を調べるため何時も持ち歩いているのか、懐から小振りの合成樹脂製の張型を取り出した。

皐月が毒々しい形状の青いビニールの筒を亜紀の秘裂に押し当てた。

「流石は銀子さんから鍛えられた女体だけの事はあるわ！前技も無しにこのオモチャを嬉しそうに呑み込んで行くじゃない！」

皐月から突然前の穴に鈍器を押し込まれ、身体を震わせて悲鳴を上げた。

「中々感度も良さそうやな・・・それに締め付け具合も申し分無いようや・・・」

淫具を操作して、熟れた秘肉をまさぐり、亜紀を悶えさせながら呟く様に口にした。

「それじゃ、私は後ろの穴の具合を調べさせてもらうわ！」

皐月の検診棒を前の穴に受け入れた状態で、菖蒲が赤いビニール筒で亜紀の菊花を突いた。

「こちらでも銀子さんの調教が行き届いているみたいね！この張型を抵抗なく呑み込んで行くわ！」

グイグイと後口に淫具を押し込みながら嬉しそうに声を上げた。

「それに感度も中々良さそうね！」

小刻みに筒具を操作して反応を見ながら口にした。

「死んだ村崎親分みたいに女のお尻の穴に目の無いお客も沢山いるけど充分満足させられそうね・・・」

今や亜紀の股間は前後から遣り手姉妹の淫具に蹂躪されていた。

薄い隔壁一枚を通して蠢く淫具に亜紀の性感は高められ、体温が上昇して濃厚な雌の匂いを立ち昇らせていた。

前後から押し寄せる淫靡な刺激に一段高い性感に登ろうとした時、双子姉妹はさっと責め具を引いてしまった。

二人の目的は女をイカすことでは無く、女体の調子を調べる為であり、さも当然という態度で再び女穴の検診具を懐に仕舞い込んだ。

亜紀は衆目の前で最後の醜態を晒す恥をかかされずに済んだ一と、ホッとすると共に、何か物足りないモノを感じた。

「さて、亜紀姐さんの方は男を満足させる身体の持ち主だという事が判ったけど、こちらの

若い娘の方はどうかな？」

亜紀の身体検査を終えた二人は次に並んで立つ三人の娘の方に向かった。

傍で亜紀が辱められる様子を見ていた少女たちは怯えた表情を浮かべた。

「アンタは外人の血が半分入っているという話やが、その影響か随分と濃いな！外国の男は毛深いのが多いけど、よっぽど父親は毛深い人だったようね・・・」

両脚の付け根まで黒々と繁茂したデルタ型の春草を見詰めて笑い声を上げた。

「本当だ！亜紀姐さんと大きな違いや！どちらが年上か判らんな！」

「さて、中の具合を見せてもらいましょうか・・・」

栄美の左右に位置した双子姉妹は息の合った手筈で濃密な痴毛をそろそろと掻き分け、その秘められた部分を露わにした。

「水揚げして直ぐに、大亜門戸会も崩壊してしまって、あまり使い込まれていない様ね！」

「本当だ！まだ端の方に薄い膜が残っているじゃない！」

剥き出しにした媚肉の秘孔の入り口に半透明の薄い膜が残されているのを発見して、貴重な物を発見したように顔を近寄せた。

不気味な雰囲気を漂わせる中年の双子姉妹に秘裂を覗き込まれ、顔を赤く染めて激しく首を振った。

「フン！そんなジャマツ気な物は私の修行中にアッという間もなく無く消えてしまうよ！」

栄美の処女膜の残滓を貴重な物を見る様に覗き込む二人に、綺羅羅が忌々し気に声を上げた。

「それに、そんなモジャモジャは芸の邪魔だから綺麗に剃り上げてしまうよ！」

と、脅す様に声を上げた。

「ふーん、これが村崎親分を縊り殺した尻の穴かね？」

散々騷り尽くされ腰を落として泣きじゃくる栄美の姿を尻目に、次に希美の背後に回った二人は左右から尻たぶを押し広げ、剥き出しになった僅かに菫色を帯びた小菊を眺めまわした。毒女姉妹に騷られる亜紀や栄美の姿を目に焼き付けられた希美は恐怖に竦み上がって身体検査を受けていた。

「ふーん、ちんまりとおさまってとてもそんな風には見えないけどねえ・・・」

皐月が親指の腹でその中心をグリグリと撫でまわしながら声を上げた。

不潔な排泄口を指で騷られる羞恥に希美が激しく首を振った。

ヒィ！と喉から悲鳴を発して身体を仰け反らせた。

皐月がその部分に口付けして舌を伸ばして、内部をまさぐったのだった。

「流石に銀子姐さんから鍛えられて、この部分の出来も良いようじゃないか！」

暫く舌先でその部分を確認して満足したように声を発した。

女体管理士と自称する繊細な指先で女性器や乳房などを撫でまわした後、その部分に女穴の検診棒を突き立て、「若いだけあって、すごい締め付けじゃないか！これじゃ村崎親分が絞殺されたのも分かるね・・・」と、皐月が筒具から伝わる感触に驚いたような声を上げた。

「目高組一の格闘術をもったお竜姐さんの血を引いているのかも知れないね？」菖蒲が前から淫具を操作しその部分の能力を確認しながら同意するように声を上げた。

「それじゃ、もう良いかい？これから修行に入るよ！」

亜紀と三人の娘に対していたぶり尽くす様に身体検査を終えた遣り手姉妹に綺囉囉が声を掛けた。

女達を連れて花電車の練習場に割り当てられた部屋に向かった。

内田と山崎や遣り手の姉妹や何人かの男達が興味深そうにゾロゾロと後を追った。

調教室に亜紀と三人の娘を一行に立たせた。

首輪と後ろ手錠を外されて、恥ずかしい部分を隠そうとするのを綺囉囉が邪険に払いのけた。そして、改めて間近から女達の股間に顔を寄せて秘貝をまじまじと覗き込んで一つ息を吐いた。

睨み付ける様に亜紀の顔を見詰めて、「アンタは銀子に仕込まれて、前や後ろの穴で卵やピンポン玉を出し入れできる様になったみたいだけど、これからの練習はそんな生易しいモノじゃ無いからね！」

恐怖に竦む女達を更に脅し付けるように鬼の様な険しい表情で怒鳴った。

修行の開始

「先ず最初にこのジャマッ気なお毛ケを剃り落そうじゃないか！修行の邪魔だからね」

栄美の濃密な陰毛を指先で撫でながら綺囉囉が宣言するように口にした。

この醜怪な老女の前に股間を開いて、恥ずかしい部分を覆う毛を撫で付けられるだけでも堪

らない苦痛であるのに、その最後の盾を奪い去られる事に恐怖を感じた。

「それじゃ、その役は私達^{アッしら}にやらせて下さい！」

見物人の中からサブと吉原が進み出た。

かつては、捉えられた目高組の女達の下刈りの専任となっていたが、和久井の手で永久脱毛されてからは、その役目も無くなり、黒川の下で下等な娼婦たちの下の毛を当たっていたのだったが、再び上等な女の股間をまさぐる喜びに頬を淫靡に歪めて、直立する女達の前に進んだ。

「何、心配することは無い、私達^{ねー アッしら}は昔アンタらのお母さんのココの毛を毎日剃っていたんだから・・・」

開け放たれた股間の前に腰を降ろし、怯える娘達の顔を下から見上げながら、楽しそうに口にした。

お湯の入った洗面器や泡立て器や剃刀が直立する女達の前に並べられ準備が整った。

亜紀の前にはサブが、栄美の前には吉原がドカッと腰を落着けた。

熱い蒸しタオルを栄美の股間に押し当て、痴毛がしっとりとなるまで蒸し上げせながら、吉原は、

「昔は毎日のように、アンタらの母親ココの毛を剃って上げてたんだぜ・・・まさか娘の毛まで剃るようになるとは夢にも思わなかったぜ・・・」

と、栄美の反応を楽しむ様に笑いながら口にした。

「剛沢さんの長年の愛人の亜紀姐さんのココを剃ることになるとは思ってもいませんでしたね・・・元々お毛ケが薄くて剃るには惜しいようだが、命令とあっては致し方ありませんからね・・・」

剃り良いようにもっと股を開いて腰を突き出して下さい」

と、亜紀の前に腰を降ろしたサブが指先でしっとりとした湿った悩ましい春草を撫でながら卑猥なポーズを強制した。

アーッ、アーッと剃刀が股間の柔肌を撫でる度に声が上がった。

冷たく光る刃が柔肌を通り過ぎる度に、漆黒の飾り毛は剥ぎ取られ、白い地肌が露わとなっていた。

「どうです？中々良い気持ちでしょう？」

秘裂の両側に萌え出た柔らかな毛を剃刀の先で剥ぎ取って行き、亜紀の反応を確かめながら薄笑いを浮かべて声を掛けた。

「ふう・・・やっと終わったぜ・・・」

二人掛で四人の女の剃毛が終わり、ふっと息を吐いた。

周りを取り囲む男女の淫猥な視線が剥き出しにされた女達の股間に集中した。

「どうでい、可愛いもんじゃないか！お前達も見て見ねえ！」

サブや吉原に交じって山崎や内田も手鏡を手に女達の股間を見せつけた。

その手鏡に映された変わり果てた股間の様子を思わず目にしまい、見てはいけないものを見てしまったと瞼をキツク閉じ顔を背けた。

「心配しなくても、花電車の修行が終われば、又元通り生やさせてやるよ。最初のお客様に芸を披露する時に、お客様に剃って頂くんだよ・・・」

綺囃囃が陰湿な声で告げた。

「その後は、毎日吉原とサブに剃ってもらって、何時も剥き出しでいるんだ！」と、笑いながら黒川が続けた。

「それじゃ、早速修行に入ることにしようかね・・・先ず弛^{たる}みきったお前達のアソコの筋肉を芸が出来る様に成るように鍛えないといけないからね・・・」

綺囃囃が持ち込んだ数々の女体トレーニングの道具を指さして、見物していた三下組員に声を掛けた。

「誰か、其処に置いてある細長い木の箱を持って来て下さいな」

綺囃囃の指示を受けた組員が細長い四つの箱を運んで来て綺囃囃の足元に置いた。

それらの箱はまるで掛け軸を入れておく箱の様な形状で、箱を開くと中にはテニスボールより一回り小振りな、鈍く銀色に輝く金属球が10個奇麗に並べられていた。

興味深そうに覗き込む見物人の視線が気になったのか、端から一つ金属球を手にとると、黒川の手握らせた。

球は鉄で出来ているのか、手では握り潰せないほどがっしりと硬く出来ていたが、外皮が薄いのか、あまり重さは感じられなかった。

次に隣に並べられていた鉄球を手渡した。

球の大きさや形状は同じであるが、構成する外殻の厚さが違うのか最初の物より少し重く感

じられた。

黒川の反応に気を良くした綺囉囉が三番目の球を手渡した。

若干ではあるが、重さが徐々に増している事が判った。

「良く出来ているでしょう？この鉄球は外観は同じだけど、段々と重く成るように作られているんですよ・・・」と、微笑みを浮かべて説明した。

「そして・・・一番最後の球は・・・」

綺囉囉から受け取った鉄球を手にして、「ウッ！何だこれは？！まるで砲丸投げの砲丸の様なないか！」と、そのずっしりとした重量に思わず声を上げた。

「これを、毎日毎日時間が在れば、アソコに含んで、寝姿勢で入れたり出したり、立ち姿勢で上げたり下げたりを練習してアソコの筋肉を鍛えるんですよ・・・」

と、怯えた表情を浮かべる女達を一瞥した。

「これで鍛えればバナナどころかキュウリでもサクサク切れる様になりますよ・・・」

この娘達が自らの女体を人間ポンプと化して鈍く銀色に輝く鉄球を出し入れする姿を想像して、見物の男女から興奮を抑えかねて溜息が漏れた。

「もっとも、一番最後の球は重すぎて最盛期の私だって、上げ下げは出来なかったんですけどね・・・」と照れた様に笑った。

「聞いたか、お前達？この最後の球を上下出来るように成ったら綺囉囉姐さんを超える花電車の名手に成れるぞ！」

黒川が喜んで手を叩きながら大声を発した。

直立する女達の前に箱を置くと、一番軽い球から、次々とその部分に含ませていった。

秘奥に冷たい鉄球を押し込まれたままどうすれば良いか判らず、苦悶の表情を浮かべる女達に、「何をやっているんだい？！さっさと呑み込むんだよ！」

と、手にした鞭で女達の尻を叩いて回った。

「銀子に教わって卵を呑み込んだり産んだりする位の芸は身につけているんだろ？」

と、陰しい表情で迫った。

綺囉囉の言う通り、卵芸は仕込まれていたが、それより一回り以上大きな鉄球を含まされた初めての体験に難渋していたのだった。

全身に汗を浮かべ、そんな困難に身悶えする女達の様子に躊躇することなく容赦なく鞭を振るった。

綺囉囉の剣幕に恐怖し、女達は悲鳴を上げ、汗を撒き散らし激しく腰を振って、半分体外に姿を覗かせる鉄球を女洞内に吸い上げようとしていた。。

始めは面白半分に綺囉囉による調教を見物していた男女であったが、悲鳴と怒号の飛び交う、その酸鼻な花電車の訓練に、心底怖気を覚え、何時間もしない内にその多くは逃げ出す様に調教場を後にした。

奪還計画

それからしばらく過ぎた頃、亜紀も三人の娘達も綺囉囉から一連の花電車の珍芸を教え込まれ、鍛え上げられた女肉に最初の客を迎えようとしていた。

今は黒川によって拉致されて来た百花と芽衣が綺囉囉の肉体訓練を受けていた。

此処は青山の手で逃げ果^{おお}せた暁美と青山が世間から身を隠して、二人だけでひっそりと暮らす家であった。

「おう、入ってくれ」

めったに人が訪れることの無い家に、珍しく青山が客を招き入れた。

玄関を通して入って来た男に暁美の面識は無かった。

と言うより、コート襟を立ててソフトを深く被った顔を良く見ることは困難であった。

まだ寒くも無いこの時期にコートを羽織り、ソフトを被るとは奇異に感じる暁美であった。

ソフトを取りさり、コートを脱ぐと男の顔が露わとなった。

男の顔全体は重度の火傷による醜いケロイドが覆っており、耳たぶは欠損し、頭髮もほとんど残っていなかった。

醜い傷跡を晒す不気味な男の顔を驚きと不安げに見詰めた。

「何だ！折角助けられたのに又縛られているのか？」

ジーンズにTシャツ姿の上半身をロープで縛られ、縄尻を柱に固定されて畳の上に腰を降ろす暁美の様子を目にして、驚いたように耳障りな掠れた声を発した。

「おいおい？呑気な事を言わないでくれよ！暁美をこんな体にしたのはアンタ達だろう！・・セックス中毒だ！普段は落ち着いているが、何かの拍子に禁断症状を起こして、狂ったように男を欲しがると・・そうなるともう手が付けられない。だから普段はこうやって縛っておく

しかないんだ・・・」

暁美は縛られたまま畳に尻を突き、自分の過去を知っている風の醜く爛れた男を不審げに見詰めた。

「暁美・・・この人が判らなくても無理は無い・・・この人は黄原さんだ。」

「黄原？・・・」

その名を聞いて暁美の瞳に一機に憎悪の炎が宿った。

その時、黄原に続いて、もう一人の男が玄関をくぐった。

その男の顔を見て暁美の顔色が変わった。

「あなたは英雄叔父！？」

暁美の脳裏に勝手に莊那井組の親分を気取り、目高組を見捨てて大亜門戸会から杯を貰って剛沢に媚び諂い、実の姉である晴江を犯した時の光景がまざまざと蘇った。

憤怒の表情を浮かべて英雄に掴み掛かろうと、立ち上がり、駆け寄ろうとしたが、柱に繋がれたロープにより引き戻され大きく尻もちをついた。

上半身をロープで縛り上げられ、その端を柱に固定された状態では、どうすることも出来ず、それでも怒りを抑えられず、目の前に立つ叔父に向かってペツ、ペツと唾を吐き掛け続けた。

「暁美！お前の気持ちは分かるが・・・」

青山が怒りに顔を真っ赤にして興奮状態の暁美を宥めようと声を掛けた。

「大亜門戸会を潰して剛沢を殺したのが黄原さんで、その武器を提供したのが英雄さんだ・・・」

「暁美！済まなかった！本当は姉貴が生きている内に助け出したかったのだが、大亜門戸会の傘下となってからも剛沢の疑惑の目が強く、救出の機会を見つけられない内にこんなに長引いてしまった！本当に済まない！」

床に尻もちをつく暁美の前に土下座の姿勢を取ると嗚咽しながら詫びの言葉を発した。

その英雄叔父の真摯な姿に暁美は声を失った。

「英雄さんは小さい時からずっと晴江さんに劣等感を抱いており、その憤懣をぶつけようと実の姉を犯そうとしたが、逆に晴江さんから諭され、心を入れ替えたんだ。その後立派な莊那井組の親分と成り、瓦解しかかった組をまとめ上げたんだ・・・」

宥めるように暁美の背を撫でながら静かに説明した。

「何故・・・黄原が此処に？」

変わり果てた黄原の顔面にチラッと視線を送って訝^{いぶか}し気に声を発した。

「死んだ銀子の遺言だ・・・」

暁美の質問に黄原がすっかり変わった声で答えた。

「俺は銀子をあの地獄から助け出す積りで、単身大亜門戸会に殴り込みを掛けた・・・しかし、逆に俺の手で銀子を殺してしまった・・・」

その時の光景が蘇るのか固く目を閉じて、絞り出すように声を出した。

「生きる意味が無くなった俺は、銀子の後を追って死ぬ積りで銀子の^{なきがら}骸を抱いていた・・・炎は直ぐ傍まで来ていた・・・その時銀子の声が耳の中に聞こえたんだ・・・」お願い・・・あの娘達を助けてあげて・・・“、てな・・・ふん！どうせ死ぬ間際になって突然死ぬのが怖くなってそんな空耳を聞いたんだ！・・・それからどのようにして現場から逃げ出したのか、全く記憶が無い。気が付いたら病院のベッドの上だった・・・」

銀子と共に死ねなかった自分を恥じる様に、俯いたまま激しく首を振った。

「しかし、あれは確かに銀子の声だった・・・俺は銀子の最後の望みを叶えて上げたいんだ！」

「天国に向かう銀子さんの魂が、娘達が黒川に拉致される処を見て、最後に黄原さんに託したのかも知れないな・・・」

目を閉ざして青山が呟くように言った。

「お前達は銀子の事をさぞかし恨んでいる事だろうが、アイツはアイツでお前達を責め罵る事に何時も苦しんでいたんだ・・・」苦しい表情で絞り出すように口にした。

「暁美・・・お前は自分の娘達は、あの時死んだものだと思っているのだろうか？」

英雄がテーブルの上に置かれた小さな位牌を見詰めながら言った。

位牌の前にはコップに入った水と陰膳が据えられ、一輪の花が添えられていた。

死んだはずの愛美を吊って毎日欠かさずに奉げられていた物だった。

「愛美も希美も栄美も亜紀さんもみんな無事だ！炎の中でお前達と離れ離れになった後、黒川に拉致されて焼け落ちる建物から脱出したんだ！」

暁美の目に精気が浮かび英雄の方をじっと見つめた。

「今、娘達は、黒川の経営する秘密ソープに幽閉されている。かつてのお前達のように闇の世界の金持ちの変態客に身体を供する為に綺羅羅から花電車の特訓を受けて、客の相手をしているところだ・・・」

突然知らされた意外な事実に暁美の目は左右に動き回った。

「兎に角、恨み重なる俺たちと一緒に娘を救出するのは、お前も色々在るだろうが、死んでいった者の願いだ・・・」

「黄原さん、アンタに言われていた武器を用意しておいたぜ・・・」

英雄が肩に掛けて持ち込んでいた大型バッグのジッパーを開いて拳銃を取り出した。

「お気に入りのガバメントだ！」

大型の自動拳銃を黄原の手に渡しながら、「生憎コルト製は手に入らなかったから SW 製だ・・・」

「ああ・・・それで良い・・・」

「しかし、こんな百年も前に設計された古臭い銃をよく使う気になるな？」

「古くから使われてきたモノにはそれなりの信頼性ってものが在るってもんだ・・・」

受け取ったガバメントから弾倉を抜いて弾が入っていないことを確認し、撃鉄の具合や引き金の重さなどを確かめ銃を構えながら応えた。

「青山さんから頼まれたマグナムだ・・・」

バッグから長身のリボルバーを取り出し青山に手渡した。

「曉美、お前はこれを使え・・・UZI だ・・・」

小型の自動小銃を曉美の前に置いた。

上半身を絡めていたロープを解かれていた曉美が小型とは言えズッシリと思い短機関銃を手にした。

「曉美！大丈夫か？そんな身体で？」

青山が心配そうに声を掛けた。

「やるわ・・・あの子を助け出すためだもの」

銃を手につまみと口にした。

「俺はこれだ！」

と円形弾倉に収められた六発の擲弾を自動的に発射できる擲弾発射機を手にした。

「何時もながらお前の組の武器調達能力には恐れ入るよ！」

黄原が半ば呆れたような声を上げた。

「一体どうやったら、そんな武器が集められるんだ？」

「それは営業上の秘密ってやつさ・・・」

各自自分に割り当てられた兵器を手を確認しながら、次の作戦会議に入った。

「愛美たちが男を取らされているのは、大昔に岡照組が秘密のソープを開くために立てられたビルで、その後、目高組、大亜門戸会と持ち主が代わり、現在は黒川の組が手にしている。

老朽化は進んでいるが、女達の脱走防止と外部からの侵入に備え守りは堅固だ。」

英雄が説明を始めた。

「3階から7階までが売春施設で、上に行くほど高級な売春婦の部屋となっている」

「何処かの肉屋みたいだな？」

「そうさ、高級な女肉を提供する肉屋さ・・・」

青山が混ぜっ返したのに苦々しく口にした。

「入口は3階となっていて、其処のガードは嚴重だ。3階はほとんどが事務所や調教施設が占めていて、実質的な売春部屋は4階からとなっている。愛美達3人と亜紀は黒川組の稼ぎ頭だから最上階の7階に居る」

「以前は、1階と2階は組の経営する不動産屋と貸金屋だったから、敵襲を受けた時、3階の事務所に詰めている組員と1階2階から組員が駆け付けて挟み撃ちに出来る体制だったが、黒川は売春業以外興味が無いようで、現在1階と2階は空きテナントになっていて無人だ。その点では幾分楽になったと言える・・・」

黄原が補足した。

「そうは言っても、3階の入り口は、拳銃くらいでは歯が立たないぶ厚い鉄扉で閉ざされており、ドアの内側に一人が立ち、来客を小窓から確認してから、横の小部屋に居る男に合図してドアを遠隔で解錠するシステムになっている。常に二人の男が警備しており、連携して動かないとドアは開かない様になっている・・・」

「前は銀子が内部から解錠してくれたが、今回はそれが期待できない・・・」

と、口にするると暫く思案していた黄原であったが、

「指向性の爆弾を用意してドアの前に置いて、爆風がドアに集中するようにしてドアごと吹き飛ばそう！英雄、用意できるか？」

「ああ・・・それぐらいなら大丈夫だろう・・・、しかし、どうやってドアの前に爆弾を置くんだ？」

「建物の中のタバコや飲み物の自動販売機用に週に一回補充が入る。もちろん部外者は内部に入れないから組員が外で受け渡しをするんだが、集配者を襲って爆弾入りの荷物とすり替えよう」

と、青山が口を開いた。

「男より女の方が組員からも疑われないだろうから、爆弾の入った荷物は私が運ぶわ」

暁美がきつとした表情で口にした。

「兎に角これは俺の私闘だ！荘那井組は関係ねえ！準備が整ったら俺は組を後目に譲って組を抜ける！」

英雄も不退転の決意を示した。

秘密ソープ

「全く剛沢の奴、生きている間だけじゃなく、死んでからも迷惑かけやがるぜ！大亜門戸会殴り込みの首謀者の疑いを掛けられて散々搾られたぜ・・・」

花和組総長の花和宗次が憎々し気な表情を浮かべながら亜紀や三人の娘達を睨みつけるように口を開いた。

彼は、大亜門戸会に殴り込みを掛けた黄原に武器を提供したとの容疑で警察に拘留されていたのだった。何度も拘留期間を延長して取り調べを受けていたが、証拠不十分で最近になって保釈されていたのだった。

在らぬ嫌疑を掛けられた拘留中の恨みを剛沢の愛人や三人の娘の肉体で晴らすべく、黒川の経営する秘密ソープを訪れていた。

部屋には腹心の菊田と黒川の三人が女達と対峙していた。

全裸のまま床に正座しながら、不気味な男達から睨み付けられ怯える娘達を庇うように亜紀が花和を睨み返した。

「剛沢に恨みが有るのは分かるけど、それは私に返せば充分でしょ？娘達は関係ないんだから放してやって！」

気丈に声を上げる亜紀に、

「こら！お客様に対してその言い方は無いやろ！売春婦としてお客様に要求されたら何でも従うように調教されたやろ！」

突然反抗的な態度を示した亜紀の頬に平手打ちを喰らわすと、次に、本当に舐がなって無くて済みませんと、花和に対してペコペコと謝った。

「血は繋がってなくても、一時は蝶よ花よと剛沢から可愛がって育てられた娘達だ！亜紀姐さんの熟れた体と若いピチピチの身体を同時に味わわせて貰うぜ！」

と、眼窩に淫靡な光を浮かべ、頬を歪めて笑った。

「それに、この淫売娘！」

希美の方に陰険な顔を向けて口にした。

「お前が尻の穴で村崎親分を縊り殺したから、こんな事になってしまったんだ！その落とし

前はしっかりと付けて貰うからな！」

怒気を含んだ声で睨み付けられ、希美の顔が恐怖に蒼褪めた。

村崎会にあって村崎を心から敬愛し、村崎親分の一の子分と自認していた花和にとって、直接村崎を殺した希美はまさに憎むべき存在だった。

「村崎親分の落とし前は私に付けさせて下さい！私が花和様を存分に楽しませます！この子に手を出さないで！」

怯えて震える希美を庇うように、亜紀が立ち上がって花和に哀願しようとした。

「^{ばばあ}婆は、すっこんでろ！」

一声叫ぶと、立ち上がりかけた亜紀の腹に鋭い蹴りを加えた。

堪らず、全裸の亜紀が股間を広げたままもんどり打って仰向けに倒れ落ちた。

娘達が悲鳴を上げて亜紀の方に身を寄せた。

花和の目が大きく股間を広げたまま床に尻もちを着く亜紀の股の付け根に思わず注がれた。

元々薄い飾り毛であったため、霞むような春草越しに熟し切った媚肉の秘裂がはっきりと覗いていた。

その爛熟した淫靡な佇まいをジッと見詰めて、これが敵対していた剛沢の愛した雌穴か・・・と思うと喉がゴクリと鳴った。

「宜かろう・・・一生懸命奉仕して俺を楽しませてみな！・・・但し俺を満足させられなかったら、その小娘のケツの穴に焼け火箸を突っ込んで、マ■■■■の穴にはヤッパを呑み込ませて切り裂いてやるからな！」

無論本気では無かったろうが、親とも慕う村崎を希美に殺されたとの恨みは強く、激しい怒気を籠めて叫んだ。

大事な商売モノを傷付けられたら堪らないと、マアマア・・・と、掌をヒラヒラさせながら黒川が肥満した身体を立ち上がらせ、

「此女奴らは、綺囉囉から花電車の修行を受け、今日その卒業式として、邪魔っけな前の毛を剃り落すことになっております。その剃り落しの役を是非花和様にお願いしたく思います。」と、ペコペコ腰を折って頼んだ。

一度は綺麗に剃り落された痴毛であったが、長い花電車の修行の間に元通り生え揃い、最初の客に芸を披露する前に剃り落される事になっていたのだった。

黒川の必死の説得にスケベ心が誘発されたのか、ガクガクと震え、蒼褪めて床に正座する女達を淫靡な目で見まわしながら、それも悪くないなと思った。

「それじゃ、皆立って花和様に剃って頂くマン毛をお見せするんや！」

黒川が女達に直立するよう命じた。

花和の目の前に四人の女が股間の陰毛を丸出しにして立たされていた。

手で股間を隠すことを禁じられ娘達は周知と恐怖で両手で顔を隠して啜り泣いていた。

四人並んだそれぞれの女の春草の毛量や形を見比べる様に目を左右にそよがせ、淫靡な笑みを浮かべ、「ほら！もっと見え易いように脚を開いて腰を前に突き出すんだ！」と、残酷に命じた。

「ほら、オ●●●ももっとよく見えるように両手で広げてお見せするんや！」

黒川が顔を隠していた両手で秘裂を広げてその内部を花和に見せる様に命じた。

過酷な命令にも逆らう事は許されず、女達は羞恥に顔を真っ赤に染めながら秘裂を左右に押し開いた。

漆黒のカーテンの奥に鮮やかなピンク色の花園が姿を現し、思わず身を乗り出してその部分を覗き込んだ。

「お前達が、其処に毛を生やしてられるのも今限りだ！これから一生其処を剥き出しにすることになるんだ！」顔面を朱に染めて羞恥に涙を滴らせる女達に黒川が残忍な声を掛けた。

「そうだ！パイパンにされる前に記念に写真を撮っておこう！」

黒川がカメラを持ち出して来て、「ほら！もっと股を開いて指でガバッと開くんだ！」とか、命じながらシャッターを押し続けた。

女達は羞恥と屈辱に咽びながら、人には見せられぬ部分を写真に収められていった。

一連の撮影が終わると、「今度はケツ穴の周りの毛も撮っておくんだ！」と、後ろ向きにさせ、脚を広げて尻を突き出し、自らの手で尻たぶを押し広げるよう強制した。

両手で大きく尻たぶを開けながら、恥ずかしい後口まで男達の目に曝け出さねばならぬ惨めさに涙を滴らせた。

部屋の中には女達の啜り泣きとシャッターの音が響き続けた。

「それでは、花和様、私はここで退散いたしますので、後はご自由にお楽しみくださいませ。」

黒川が肥満した身体でペコペコとお辞儀をしながら挨拶した。

既に剃毛のための剃刀などの準備や、花電車の芸に使う小道具や、女体責めのための装備が女達の前に並べられていた。

黒川が居なくなれば、後は気心の知れた腹心だけになり、心置きなく女達をいたぶれると、喜んだ花和は、ウムと肯くと部屋を辞して行く黒川を目で追った。

部屋の扉をそっと閉じると、「ふう・・・こんな時に緑川まで来るとは・・・」と、ため息をつきながら独り言を口にした。

「ただ、アイツのもたらす情報は貴重だから大事にしないとな・・・」

これから緑川のもとに挨拶に行こうと、廊下を歩み始めた。

緑川とは剛沢と癒着していたエリート警察官僚であり、以前は正義感に燃えて警察庁に入省した若手エリート公務員であったが、部下の悪徳警官達の策謀に載せられ目高組の女達を抱いてからは、残忍な性的興奮に目覚め、すっかり腐敗した国家公務員となっていた。

悪徳警官達から女体責めの快感を教え込まれ、その抑えがたいに肉欲を満たすため、度々大亜門戸会の本部を訪れては、女肉の接待を受けていたのだった。

警察内部で出世を重ね、今は本庁で重職に就く緑川のもたらす情報は貴重で、剛沢もその都度暁美達を宛がい、下にも置かず慰撫していたのだった。

緑川の目の前にタオル地のガウンだけを身につけた百花と芽衣が正座していた。

二人は黒川組の男達により強引に拉致されて、此处に連れ込まれてから、まだあまり日は経っておらず、綺羅羅による肉体改造も半ばの状態であったが、緑川への女体接待のため急遽駆り出されたのであった。

緑川には一つのコンプレックスがあった。

国家公務員としての重圧によるストレスのためか、それとも遺伝的体質によるものか、若い頃はふさふさしていた髪がまだ四十代半ばだというのに、額から後頭部に掛けて禿げ上がり、日頃は鬘を付けて隠していたのであったが、ある日激しく女を責めていた最中に落としてしまったことがあった。

この様子は隠しカメラで部屋の様子を見張っていた監視員の目にするところとなり、録画されていたその時の様子は、たちまち大亜門戸会内部に広まった。

その後も、剛沢や他の組員達は、この上級公務員の気分を害さない様に、何事も無かったように接待していたが、まだ二十歳になったばかりで若くて、怖いもの知らずの辛辣さを持つ百花と芽衣の二人は、緑川が大亜門戸会の本部を訪れる度に笑いをこらえるような仕草を見せ、緑川も二人の態度に気付いていたのだった。

自分が馬鹿にされていると感じながらも他にタダでこのような快楽を得られる場所は無く、

軽蔑の視線を感じながらも度々訪問していたのだった。

その自分を小ばかにした態度を示していた、百花と芽衣が蒼褪めて震えながら、目の前に佇んでいた。

幼い時からエリートとして育てられ、日本最高の大学を卒業し、上級国家公務員となるように教育され、それを実現して来た緑川にとって、自分が下級国民と見なす者から馬鹿にされる事は、例えどんな些細な事でも、許し難い憤りを感じる性格であり、この目の前に正座して怯えた表情を浮かべる二人の女には心の底からどす黒い憤怒を覚えるのであった。

「お前達は俺の頭を見て笑っていたんだろう？」

目に押し殺した怒りの光を浮かべて問い掛ける緑川に、ゾットとするような威圧を感じた二人は、「そんな事は在りません！」と額を床に擦り付けて叫ぶように声を上げた。

「良いだろう、見せてやろう・・・」

と、口にすると、自らの手で鬘を取り去った。

後には側頭部だけに髪を残し、額から後頭部に掛けて禿げ上がった男の顔があった。

それは江戸時代の男の頭から鬘だけを取り去ったような滑稽な姿であったが、憤怒の表情を浮かべる緑川を前にして、笑う余裕など二人には無かった。

百花と芽衣の二人を立ち上がらせると、いきなり二人のガウンをさっと肩から引き下ろした。途端に若い女の瑞々しい弾むような乳房がこぼれ落ちた。

アッと悲鳴を上げたが、緑川はそれを気に留めず、たわわに実った果実の様な張りの在る白い艶やかな乳房と、その先端に小生意気にツンと突き出した桜色の乳首を注視した。

百花のボリュームのある乳房の重さと、柔らかさを確かめる様に、下から手を差し入れグッと揉み搾った。

突然の事に思わず手を払いのけようとするのを、「その手が邪魔だ・・・後ろに廻せ・・・」と、冷たく言い放った。

本能的に身体を守ろうと、緑川の両手を掴んだ百花であったが、緑川の冷徹な視線に、ゾットとするものを感じ、掴んでいた手を離し、おずおずと後ろに廻した。

ガウンを止めていた腰紐を抜き去って、二人の両手を後ろで縛り上げた。

二人はガウンの下に何も下着を着けておらず、支えを失ったガウンの前がだらしなく開け、下腹部が露出した。

綺羅羅による花電車の修行を受け始め、二人の股間は剃毛され幼い女兒の様な可憐な秘裂を

晒していた。

「これが・・・剛沢が最後にチン■を突っ込んだオ■コか・・・」

ガウンの陰から仄暗く露出した、くっきりと一筋の縦に割れた淫裂を眺めながら、上級国民には似つかない下品な単語を口にした。

二人を並んで立たせ、両脚を開かせ腰を前に突き出させると、両手で二人の雌の部分为爱撫し始めた。

性技に熟達した剛沢による性感を紡ぎ出す快感とは程遠い、稚拙で気味の悪い指先の動きと緑川の全身から発する怒気に当てられ百花も芽衣も恐怖にガタガタを身体を震えさせ続けた。

その時突然入口のドアが開き、「緑川様！何時もお世話になっております！」と、黒川がドアの隙間から顔を出した。

鬘を脱いで禿げた頭を晒し、怒りの表情を浮かべる緑川の様子やその場の雰囲気、拙い時に部屋に入ってしまったと気づいた黒川は、入って来た時の恵比須顔は消え去り、「ご依頼の女責めの設備は全部揃っております。どうぞ、ごゆるりとお楽しみください！」と、言い残して、ボタンとドアを閉め、慌てて退散した。

黒川の言う様にこの部屋は、女体責めの愛好家が利用するように特別に誂えた部屋であり、緑川の性癖を知る黒川が用意していたのだった。

黒川の突然の闖入に白けたものを感じた緑川であったが、気を取り直し、部屋に用意されていた麻縄の束を掴むと縄を扱きながら怯える二人の女の前に進んだ。

後手に縛っていたガウンの腰紐を外し、新たに麻縄で縛り始めた。

肌に優しいタオル地の帯紐から荒くれた麻縄で力一杯締め上げられ二人は悲鳴を上げた。

さらに後手に縛り上げ余った長い縄を前に手繰って、白く形の良い乳房の上下に二重三重に廻して上下から挟み上げ、柔らかな乳房を前方に向かって縊り出し縛り上げて行った。

縄止めを済まし、上半身をがっちりと縛り上げられた、まだ二十代初めの二人の美女の縄化粧された姿の出来栄を鑑賞するように繁々と見つめた。

二人の若い女の淫靡な淫縛姿に興奮して目をギラギラさせていた緑川の股間のモノがムクムクと屹立し始めていた。

この凶暴で不気味な男の隆起した醜いモノが股間を貫くのかと思うと二人はゾッとするものを感じた。

直立の姿勢で太い麻縄によって上下から搾り上げられた、少し小振りでお椀の様に形の良い

芽衣と、それより大きく少し垂れた百花の乳房をしばしの間見比べていたが、新たに黒く染められた棕櫚縄を手にして、先ず芽衣に近づいた。

チクチクする硬く毛羽だった棕櫚を編んだ太い縄で素肌を縛られる事を悟とり恐怖に怯え思わず「お止め下さい！」と哀願した。

悲痛な声にも一顧だにすることなく、たおやかな肉付きの腰周りに棕櫚縄を回してぐいっと搾り上げ臍下で結んだ。

棕櫚縄の棘が柔らかな腹に食い込んでウッと呻き声が上がった。

黙々と次の作業を進める緑川は、臍下から垂れた縄を引き絞り、見当を付けて結び球をつくっていた。

その作業を隣の百花も怯えた目で見続けた。

太くて凶暴な棕櫚縄により股間縄を掛けられることを理解した芽衣は「イヤ！止めて！」と悲鳴を上げたが、逆に「うるさい！サッサと股を開くんだ！」と大声を浴びせられた。

緑川の怒声に恐怖してブルブルと震えながら両足を開く芽衣の後に回った緑川は股間を潜った縄の端を思い切り引き絞った。

荒くれた縄は柔らかく肥大した肉の二枚貝をこじ開け、縄の瘤は繊細な神経を散りばめた女の花園に深々と食い込んだ。

その激烈な刺激にヒーッ！と悲鳴を發し身体を仰け反らせた。

「次はお前だ！」縄止めを済ますと、赤く染められた棕櫚縄を手にも百花の方に向かった。

「ヒー！嫌ヤ！堪忍してー！」

隣で芽衣が股間に残忍な棕櫚縄を縄掛けされる様子を見ていた百花は、凶悪な魔手が自分に向かった事を知り、けたたましい悲鳴を上げた。

百花の悲鳴と身悶えを無視して、手際良く瘤付きの棕櫚縄を結び付けていった。

雪の様に白い芽衣の股間には黒い棕櫚縄が食い込み、ミルクを練った様な乳白色の百花の股間には赤い棕櫚縄が秘裂の間にその姿を没していた。

少しでも身体を動かすとチクチクした棘が敏感な神経を刺激するので、二人は項垂れたまま直立していた。

暫し股縄の出来栄を観察していた緑川は、「どうだ気持ち良いか？素敵な縄禪だろう？剛沢からだってこんな素晴らしい下着を送られた事は無かつたろう！」と、腹を揺すって笑い上げた。

「さあ、俺の前に正座するんだ！」

股間から込み上げる痛感に必死に耐える二人の美女に、支配者然として命じた。

このまま腰を降ろせば、また強烈な痛痒感が襲うと恐れた二人は躊躇したが、構わず緑川は女の両肩に手を置いて無理やり腰を落とさせた。

棕櫚縄表面に生えた無数の硬い棘が秘裂の繊細な神経を搔き筆り悲鳴が上がった。

自分の前面に股間から込み上げる痛痒感にビクビクと身体を震わせ涙を浮かべる美女を膝ま付かせ、暴力により女を支配するどす黒い快感に醜い股間のモノは一段と硬度を増していた。

「どうだ？剛沢のチン■と俺のチン■はどちらが大きい？」

殊更に股間の隆起した肉塊を見せつけながら問い掛けた。

緑川の男性器は雄渾な剛沢のモノと比較しようがなかったが、二人は少しでも機嫌を損なわない様に付度して、「緑川様の方が立派です・・・」とおずおずと口にした。

「そうか？俺の方が立派か？・・・それなら、この立派なチン■に何をして欲しいか言ってみろ！」と、並んで正座する二人の顔面に先走りの牡汁を滲ませる陰茎を押し付けるようにしながら問い掛けた。

ムカつく淫臭を発する肉塊を避ける様に顔を背けながら、「・・・お願いします・・・緑川様のチン■をしゃぶらせて下さい！」と、涙を滴らせながら呟く様に声を発した。

二人の打ちひしがれた様子に快哉の笑みを浮かべながら、「そうか？そんなに俺のチン■をしゃぶりたいのか？」

「・・・はい・・・しゃぶりたいです・・・」

「そうか？それなら二人で同時にしゃぶるんだ！」

両手で二人の後ろ髪を掴んで、グイッと自分の股間に引き寄せた。

隆起した肉塊を挟む様に百花と芽衣の顔が対面し、涙に濡れる二人の頬が触れ合った。

二人は身を投げ出す思いで、張りのある蠱惑的な口唇を隆起した肉塊に触れさせた。

自分を馬鹿にしていた生意気な小娘に思い知らせる痛快感と熱く熱を帯びた口唇が亀頭を這い回る性感に、思わずビクッと腰を蠢かせた。

最初は自分の意志に反して強制された肉塊への口吻であったが、緑川の男性器から立ち上る生臭い性臭が脳髄を麻痺させ始め、剛沢から夜のベッドで手ほどきされ、山崎達により鍛えられた口を駆使しての性的テクニックが自律的に発露し始めていた。

何時しか薄く開いた唇の間から舌が突き出され、丹念に舌先を使って亀頭部の表面や裏筋を

舐め回し始めた。

その二人の女の絶妙なテクニックにウットリとして溜息を吐いた。

「そうだ・・・アアー良いぞ！・・・今度はその口を開いて啜えるんだ！」

今や淫蕩な熱気に煽られまともな意識を喪失した二人は大きく口を開けて緑川のモノを呑み込み口内全体を駆使して愛撫した。

「アアー良いぞ！」と快感に身体をビクビクと震わせながら、握り締めた後ろ髪を使って、百花と芽衣に後後に口内性交を強要した。

二人の女も性感が昂じて来て、正座の姿勢から尻を上げて前屈みの姿勢となり、男のモノを口に含みながら、痛感から転じた快感を求める様に腰をモジモジと蠢かせ棕櫚の股縄のもたらす痛烈な刺激に愉悦を求め、雌芯に食い込んだ棕櫚縄の瘤をネットリとした樹液で湿らせていくのであった。

緑川は百花に陰茎を啜えさせながら、芽衣に垂れ袋を啜えさせ、又次の場面では持ち場を交代させて口による愛撫を続けさせた。

嵐のような性的興奮に巻き上げられている二人は、何も考える能力を失い、命じられるままに口を使って愛し続けた。

精力抜群の剛沢ならこのまま一時間でも二時間でも耐えたかも知れないが、女達の抜群なフェラチオのテクニックの前に耐え切れなくなった緑川は絶叫を發し腰をブルブルと震わせ、百花の口内で激しく爆ぜた。

突然口内に夥しい精液を放出され目を白黒させる百花に、「全部飲み込むんだ！溢したら承知しないぞ！」と、脅し付けた。

そして、まだ硬さの残る男根を芽衣に啜えさせ「尿道に残っている精液も啜り上げるんだ！そして舌を使って綺麗にチン■を洗え！」と、口腔を使った後始末を強要した。

緑川の足元にハアハアと荒い息を吐く芽衣と百花が浜に打ち上げられた魚の様にピクピクと身体を痙攣させながら横たわっていた。

「フフ・・・棕櫚縄の瘤をこんなに濡らしやがって・・・お前達はどうしようもないスケベ女だな・・・」

床に倒れ伏す二人の股をこじ開け、秘裂を深々と抉る凶暴な棕櫚縄と淫孔にめり込んだ瘤が雌芯より湧き出た粘っこい雌汁によりヌラヌラと濡れているのを見つけて笑い声を上げた。

「これではお前達を喜ばすために奉仕しているようなもんだな・・・」

サディストの本性を出して、残忍な笑いを浮かべながら、二人の股間を厳しく絞り上げていた棕櫚縄を解き始めた。

秘裂を厳しく責め上げていた残酷な縄を解かれ、二人はほっとした表情を浮かべた。

こまかな棘に責め上げられていた秘部は赤く腫れていた。

後手に縛り上げたままの二人はうつ伏せの姿勢で床に横たわっていたが、緑川は二人に尻を持ち上げる様に命じた。

天井に向かって高く尻を突き上げた姿勢を取るため、胸と顔を床に押し付けて上体を支え、両脚を少し開いて下半身を支えた。

薄っすらと開いた太股の間から、女の源泉と菊花が覗き見られた。

緑川は壁に掛けられた様々な鞭の中から先が幾つもの紐状に分かれた革鞭を選ぶと、頭上高く振り上げた。そして二人並んだ張りのある双臀に振り下ろした。

甲高い悲鳴と共に、ビシッと激しい音がして、鞭打たれた豊かに横に張った百花の臀肉が波打った。

次に横に並ぶ芽衣の尻目掛けて鞭を打ち下ろし悲鳴を上げさせると、再び百花の尻を打ち据えた。

ビシリ、ビシリと小気味良い打撃音が響き、それと共にヒィヒィと言う二人の悲鳴が木霊した。

鞭を振り下ろす緑川の目が異様に輝き、頬は込み上げる背徳の喜びに歪んでいた。

ハアハアと肩で息をして、鞭打ちを止めた頃には二人の女の白い尻は真っ赤に腫れあがっていた。

「どうだ！俺の事を馬鹿にする奴はこういう目に合うんだ！」

尻を擡げたまま苦痛に呻き声を上げる二人に怒鳴り上げた。

無抵抗な若い美女の尻を鞭打つ緑川の股間のモノはサディスティックな興奮に酔いしれ著しく隆起していた。

鞭打ち刑を受けたばかりの赤く染まった二人の尻を淫靡な視線で暫く鑑賞した後、腫れ上がり熱を持った双臀を両手を使って撫でまわした。

不器用な指使いで撫でまわされる不快感と傷口を触られる痛みと次に何を仕掛けて来るのかという不安感で芽衣も百花も緑川により愛撫されながらも、天井に向かって高く突き上げた尻をブルブルと震わせ続けた。

アアッ！イヤッ！突然芽衣が悲鳴を上げた。

遅しく隆起した緑川の熱鉄がズルリと秘奥に侵入を遂げたのだ。

「ふふっ・・・良いぞ！流石は剛沢の愛人を務めて来たオコだ！俺のチをグイグイと締め上げて来るぞ！ほら！もっと腰に力を入れて絞めて見ろ！」

芽衣の女の中心を貫いたまま腰を前後させる緑川が、その絶妙な内部に感激したのか叫ぶように声を上げた。

「ふふっ・・・お前の方はどうだ？」音をさせて芽衣の雌穴から抜き取った愛液に塗れたままの肉棒を今度は百花の女芯に突き立てた。

ひいー！と悲鳴が上がり全身を震わせた。

「お前も良いぞ！オの褻がチに絡み付いてくるぞ！」

ハアハアと息を荒げ、激しく前後運動を続け、若い女肉を交互に楽しみながら、「どうだ！俺のチと剛沢のチのどちらが良い？」込み上げる快感に咽びながら問い掛けた。

「ヒー！緑川様の方が良いです！」

実際は怒張の大きさや女を悦ばせるテクニックにおいても剛沢の方が上であったが、緑川の機嫌を損ねないため、二人は悲鳴を上げる様に答えた。

「そうか・・・俺の方が良いか・・・」

見え透いたお世辞とは理解していたが、これまで剛沢からタダで女体の提供を受けるためとは云え'ヤクザ者'風情にへりくだった態度で接していて上級国民として忸怩たる思いがあったのが、今こうして剛沢しか抱く事の出来なかった愛妾を蹂躪しているという快美感に包まれ、これまでの屈辱感が癒されて行くのを感じていた。

「お前達は俺の事をハゲだと心の中で笑っていたんだろう？」

激しく腰を使いながら、なおも問い掛けた。

二人とも緑川の事を内心では馬鹿にしていたのは事実であったが、本当の事を言ってしまったら次にどんな責めを受けるかと恐怖に怯え、「ヒー！そんな事はありません！」と、叫び声を上げた。

「本当か？嘘を吐くんじゃないぞ！」

「本当です！嘘じゃありません！」

後ろから激しく突き立てられながら、泣き叫ぶように声を上げた。

「お前達は本当に嘘つきだな！よおし、白状させてやる！」

甘美な媚肉に硬化したモノを激しく突き立てながら、残忍な目つきで部屋の中を見回した。

ふと三角木馬が目にとまって、背後から貫いたまま後手に縛られた百花を立ち上がらせた。

「ヒィー！イヤヤ！堪忍してー！」

後から雌芯を貫通されたまま歩まされる百花のすぐ前に稜線を鋭く尖らせた木製の三角形の台が不気味に置かれているのを目にして緑川の意図を理解して悲鳴を上げた。

「よいしょと・・・重いな・・・」

恐怖に青ざめ、必死になって暴れる百花の身体を抱き締めると、ムッチリと肉付きの良い女体を横抱きに抱え上げ、木馬の上に載せ上げた。

ヒィィィィ！

激しい悲鳴が百花の喉からこだました。

拷問具の上に載せられ、自分の全体重が鋭敏な神経を配置した女の一点に集中し、鋭く削り上げられた稜線が柔らかな肉を置いた秘裂に食い込んだ。

股間から込み上げる冷たい痺れの様な感覚に襲われ、木馬の上で声も上げられず、身じろぎも出来ず身体を硬直させていた。

木馬の傍に顔を寄せて、鋭く尖った馬の背が深々と秘裂の奥に埋没しているのを確認すると、満足したような笑みを浮かべて、次に怯えて蹲る芽衣の方に視線を移した。

百花を三角木馬の上に残したまま、残忍な笑みを口元に浮かべ、無言で近づいて来る緑川を目にして引き攣った悲鳴を上げた。

後ろ手に縛り上げた縄を鷺掴みにすると、ズルズルと引き摺って、お湯を一杯に張られた浴槽まで連れて行った。

そして、芽衣の首根っこを掴むとそのまま湯船の中に音を立てて頭を漬け込んだ。

突然水の中に顔を浸けられ呼吸が出来ない苦しさ、麻縄に縛り付けられた身体を悶えさせたが、強い男の力で抵抗を封じた。

息の出来ない苦しさで剥き出しになった股の間で肛孔がパクパクと痙攣していた。

まるで上の口で呼吸できない空気を下の口から吸い込もうとしているかのようにパクパクと弛緩と収縮を繰り返す菊の花を見ている内に緑川の股間のモノは硬さと熱さが増して行った。残忍な肉欲が求めるままに、その熱を帯びた硬化したモノを菊座の中心に押し当てると腰にグッと力を込めた。

窒息の苦しさで身悶える芽衣の尻肉をこじ開け太い男のモノがズブズブと食い込んで行った。

日頃の肉体改造の成果か押し込まれるままに抵抗無く太い肉柱が直腸内に没して行った。

「オオ！良いぞ！流石は剛沢から鍛えられたモノだ！グイグイ締め付けて来るぞ！」

芽衣の後を蹂躪しながら身体を震わせて歓喜の叫び声を上げた。

首筋を押えていた手を緩め、芽衣の顔を水面に出した。

せき込みながらも必死になって封じられていた呼吸を取り戻す様に激しく息をしていた。

長い髪から水を滴らせ、忙しく息を吐く芽衣の耳元に口を寄せて、「分るか？今お前の尻の穴に突っ込んでいるんだぞ・・・中々気持ちのいい穴じゃないか。お前は毎晩剛沢にケツの穴を掘らしていたのか？」と、口の端に淫靡な笑みを浮かべ囁くように言うと、再び音を立てて芽衣の顔を水の中に突き落とした。

その瞬間、窒息の恐怖が再び込み上げ、肛門括約筋がグッと絞まり、緑川のモノを強く締め上げた。

呼吸を封じられた苦しさ身に悶える女体は同時に腸内に埋め込まれた緑川の肉棒もブルブルと締め上げた。その心地良さに驚喜した緑川は何度も芽衣の頭を水中に没し、悶絶させ、とうとう最後に腸管内に夥しい精液を放出させた。

暫く射精後のけだるい快美感に浸っていた緑川であったが、再び部屋の中に置かれた拷問道具を見渡した。

部屋の隅に‘石抱き’の拷問に使う三角形に切った木を並べた算盤板と積み上げられた石板が置かれているのを目にした。

流石にその上に正座させられた女の脛を傷付けないように、板の上に並べて固定された三角形の木の峰は尖ってはいなかったが、その禍々しい形状からその上に正座させられただけで女には耐え難い苦痛を与えるだろうと想像された。

板の後にはその上に載せられた女を固定するための柱のような太い木の棒が垂直に取り付けられており、緑川はその柱を掴んで重い板をズルズルと引き摺って来た。

窒息のショックでいまだ放心状態にあった芽衣は、浴槽の縁に顔を預けたままぼんやりと緑川の動作を見詰めていたが、配置の終わった緑川が自分の方に近づいて来るのに気付いて、恐怖がにわかに現実のものとなり引き攣った悲鳴を上げた。

イヤ！イヤ！と抵抗する芽衣を抱え上げ、立ち上がらせると、石抱きの板までズルズルと引き摺った。

そして、並べられた三角の木の上に無理やり正座させると、後手に縛った手を背後の柱に縛り付けた。

縛り終えて、手をパンパンと叩きながら、算盤板の上に正座させられ、背後の柱に縛り付け

られ身体を屈めることも封じられた女の姿をじっくりと鑑賞した。

自分の体重を受けて脛に食い込む木の峰の苦痛より、この残忍な男が次に何を仕掛けて来るかとの恐怖で青ざめた貌で緑川の方を見た。

緑川は積み上げられた石板を一枚持ち上げて、オヤッと声を上げた。

その石板は大きさに関わらず、随分と軽かった。

恐らく SM プレイを楽しむ際に女を傷付けないように本物の石そっくりに作られているが軽いプラスチックの模造品であることが判った。

チッと舌打ちし「これでは拷問にならん・・・」と、呟いたが、それでもその模造の石板を運び、正座する芽衣の膝の上に載せ上げた。

石板の重さを想像し、悲鳴を上げた芽衣であったが、意外なその軽さにホッとした表情を浮かべた。

一方三角木馬に載せられたままの百花は、秘裂を襲って食い込む鋭い峰から与えられるジーンとする、まるで氷の様な冷たい疼痛感を受け続け意識もそぞろとなっていた。

「降りるんだ！」 呆然とする百花に声を掛け、横抱きに抱えて木馬から降ろした。

苦痛から解放されホッとする百花の縛られた後手を掴むと、そのまま膝の上に石板を載せられて算盤板の上に正座する芽衣の傍まで連れて行った。

「さあ！この石の上に乗るんだ！」

よろよろと腰を蠢かせる百花に非情な命令をした。

緑川の言葉を聞いて、算盤板の上の芽衣も百花も同時に悲鳴を上げた。

模造の石だけならその重さに堪えられるであろうが、小柄とは言え生身の女体がその上に載れば、その重さに堪え難い苦痛を与えられることは容易に想像できた。

躊躇する桃花の尻に激しく鞭を打ち付けた。

「堪忍やで～、堪忍してやってや・・・」

鞭の激痛に耐えかねた百花がそっと右脚を石板の上に載せた。

その瞬間下の芽衣がウッと悲鳴を上げた。

早く両足を載せるんだ！と鞭が督促した。

百花が両足を載せ、全体重が芽衣の膝に掛かった時、断末魔の様な叫び声が上がり、蒼白となった体から冷たい汗がドッと噴き出した。

激痛に身体を振ったが後ろの柱に上部が固定されているため激しい身悶えを封じた。

石板の上に載った百花は平らな板の上で芽衣の正面に身体を向けて、正座するような姿勢で着座した。

ムッチリとした大腿の付け根が芽衣の目の前にあった。

緑川はそのまま百花に膝立ちするように命じた。

石板の上で身体を動かす度に芽衣の喉から呻き声が上がった。

不安定な態勢のため両膝を石板の幅まで広げて膝立ちの姿勢をしたため、緑川の目に開け放たれた股の狭間から秘められた肉の亀裂が目に入った。

木馬の稜線に傷付けられ赤く腫れた秘奥が目映ったが、その間近の菊の座は傷ついていなかった。

こちらに向かって妖しく咲く菊花の皺を見詰める内に、緑川のどす黒い情念が込み上がり、陰茎に再び力が漲り始めた。

熱く熱を帯び硬化したその先端を菊花の鎮座する窪みの中心に押し当てた。

イヤー！百花の激しい悲鳴が上がったが、その悲鳴に激励されるように、ズブズブと体内に禍々しい肉欲の棍棒が埋め込まれて行った。

肉棒を避けようと百花が身体を振る度に算盤板の上に正座させられた芽衣の膝を尖った木の稜線が抉り激しい悲鳴が上がった。

友の悲鳴を耳にしては、大人しくこのサディストに身体を委ねるしかないと諦める百花であった。

大人しく双臀を差し出す、百花の菊花を目一杯に押し広げて肉棒が体内に沈んで行った。

淫靡な男女の行為に目を見開く芽衣の目の前で最奥まで百花の腸内に貫いた緑川は、自分の肉塊を本能的に締め上げる、その目眩く感触を堪能した後、ゆっくりと身体を前後に動かし始めた。

不気味なサディストから肛門を蹂躪される気持ちの悪さに百花の悲鳴が上がったが、芽衣も自分の太腿に置かれた板の上で繰り広げられるピストン運動が直接振動となって伝わり、泣き叫び続けた。

二人の若い美女の悲鳴を伴奏とするように、快感に浸りながら腰を振り続けるのであった。

「これが親分を縊り殺したケツの穴か！確かに良い絞まりをしているぜ！」

花和が希美の尻穴を背後から犯しながら感極まった様な声を上げた。

親とも慕っていた村崎を殺された恨みを晴らすかのように、腰を激しく打ち付け、希美に悲鳴を上げさせていた。

「菊田！そっちの具合はどうだ？」

「へい！アッシもこれまで数々の女の釜を掘って来ましたが、こんなに良いケツ穴は初めてでやすよ！」

直ぐ隣では腹心の菊田が亜紀の肛口を犯しながら、感激した声を上げた。

苦悶する希美を横目に見ながらも、同じように肛門を犯されている亜紀にはどうすることも出来なかった。

「お前、毎晩剛沢に後ろを掘らせていたのか？」

肛姦の激痛に呻き声を上げる亜紀を揶揄った。

二人は四つん這いの姿勢を取らせた希美と亜紀を並べて、長時間に渡って犬の様に背後から犯していたのだった。

奪還開始

「ご注文の荷物を持って来ました」

暁美が爆弾の入った段ボール箱を抱えてインターフォンに向かって告げた。

重い鉄の扉が開いて、黒川組の男が手押し台車を押して表に出て来た。

ひょっとすると自分を知っている男が出て来るかも知れないと用心して、化粧っ気のない顔に、変装用の黒縁メガネを掛けてキャップを目深に被っていたのであるが、見知らぬ男の顔にホッとした。

「おや？始めて見る顔だな？何時もの男はどうした？」

暁美の顔を繁々と見つめながら問い掛けた。

此処に来る前に配達車を襲って、運送員とすり替わっていたのだった。

「はい、今日は急に体調が悪くなってピンチヒッターでお持ちしました」

自分の顔をじっと見つめる男の表情に、もしや見破られたのでは無いかと不安が込み上げた。

「お前中々良い顔をしているじゃないか！こんな汗臭い仕事をしているより、ウチに来れば、楽に稼げるぞ」

暁美の顎に手を掛けて自分の方に向かってタバコ臭い息を吹きかけて来た。

「ご冗談を・・・」

男は暁美の事を不審に思ったのでは無く、美貌に興味を持っただけだと分り、ほんとと安心すると、台車の上に段ボール箱を指示された通りの向きで載せ、送り状にサインさせた。

ドアに向かって指示された向きと距離に手押し台車を押してセットした後、階段を駆け下りた。

階段を駆け下りながら、胸元に仕舞っておいたリモコンのスイッチを押した。

「さて、中に入れるとするか・・・おや？何か焦げ臭いな？」

荷物を建物の中に入れようと、手押し台車のバーに手を掛けた時、異変に気付いた。

段ボール箱のドアに向かう面が突然火を噴き出したのであった。

男は慌てて、台車から飛び退いた。

表面を覆っていた紙は忽ち燃え尽き、指向性爆弾の爆発面がドアに向かって剥き出しとなった。

次の瞬間、轟音を上げて爆弾が爆発した。

猛烈な塵芥を伴う爆風が階段を駆け下りる暁美の頭上を通過した。

監視カメラの死角に隠れていた、黄原と青山と英雄が一斉に駆け寄り、階段の途中で爆風を避けて蹲っていた暁美の無事を確認し UZI（短機関銃）を手渡すと、濛々とした土煙の中に突入した。

かつてドアの在った厚いコンクリートの壁には大穴が開き、其処に居たはずの黒川組の男の姿は消失していた。

爆発の穴から建物の中に侵入すると、入口の横に設けられた監視室のガラス窓は粉々に割れ、中で男が血まみれに横たわっていた。

異変に気付いた男達が、武器を手に大声を上げてこちらにやって来るのが判った。

物陰に身を隠して、英雄が自動擲弾発射機の引き金を引いた。

轟音と共にこちらに向かって来た数人の男達の身体が引き裂かれて、血と肉片となり周囲に飛散した。

傍の事務所の扉をこじ開けると扉の隙間から中に向かって擲弾を放射した。

激しい爆発音が響き、その後に悲鳴や呻き声が続いた。

更に次々と擲弾を発射して生き残った黒川組の男達の息の根を止めて行った。

こうして、人の気配のする方向に次々と擲弾を発射しながら前進を続けた。

「こりゃ、コイツの出る番は無いな・・・」

その猛烈な威力に黄原は手にしたガバメントを見詰めながら呆れる様に呟いた。

回転弾倉に込められていた六発の擲弾を全て発射した後も、再装填して、敵の気配を感じると容赦なく破壊し続けながら奥へ奥へと進んだ。

「愛美達が7階に居るのは予想がつくが、どの部屋に居るかは分からない。手分けをして探そう。」

上に向かう階段を登りながら青山が声を発した。

全裸のまま後ろ手に縛られ、床に這いつくばる百花と芽衣が腸内から込み上げる激痛に呻吟していた。

緑川から浣腸されてかなりの時間が経っていたのだった。

全身冷たい汗に塗れ、最後の放出の瞬間を必死に堪え、こちらに向けた菊花の皺が伸びたり絞まったりをひっきりなしに繰り返していた。

しかし、緑川の許可が無く排出してしまったらどんな罰を受けるかを恐れて懸命に堪えているのだった。

「おや？何か下が騒がしいな・・・」

女の嬌声や悲鳴が外部に漏れないようプレイに集中出来るよう遮音されていた部屋であったが、流石に黄原達の殴り込みの音は僅かではあったが聞こえて来た。そして断続的に建物が振動するのを感じ、容易では無い事態に追い込まれてしまった事を感じ、二人の雌奴隷の事も忘れ、耳をそばだて様子を伺っていたのだった。

しかし、浣腸の苦痛に懊悩する百花と芽衣にとってはそれどころでは無かった。

突然扉が破壊され、一人の女が開け放たれた戸口に立った。

中の様子を一瞥して、暁美には一瞬にして状況が把握できた。

「おや？禿の緑川さんじゃないか！昔は随分と御鼻根になったね！」

自動小銃の銃口を緑川に向けながら皮肉そうに笑みを浮かべた。

本職の警察官である緑川には暁美の手にする銃がモデルガンでは無く本物であることが瞬時に理解でき、全裸のまま青ざめて両手を上に上げた。

恐怖に竦んだ陰茎は収縮し、濃い陰毛の中に姿を隠していた。

「アンタ、昔私を責めている際に張り切り過ぎて、鬘を落としてしまったことがあったね。

その後、^{ワタシヤ}私一人になってから思い切り笑い狂ったもんさ・・・」

勝ち誇った様に笑いながら、震える緑川を跪かせ、腕を後ろに廻させて、後ろ手に手錠を掛けた。

「アンタ、警察官だけど自分が手錠をはめられたのは初めてだろう？」

蔑んだ笑みを浮かべながら、手錠で相手の動きを封じた。

全身蒼褪め、恐怖に打ち震える緑川には最早抵抗の意志は無いことが明らかであった。

「昔は良くアンタからこんな猿轡を嚙まされたもんだねえ・・・」

壁一面に並べられた、SM用品の中からリング状の緘口具を手にして笑った。

金属のリングの両端には革紐が付いており、リングを緑川の口に押し込み、頭の後で縛り付けた。

こうして、上顎と下顎の間にリングを嚙まされ、口は開いたまま固定された。

恐怖に緑川の目は見開き、喋ることを封鎖された口からはアワワと呻き声だけが漏れていた。

「昔は、こうして開いたままの口の中にアンタの汚いチンポを突っ込まれて、舌でアンタの生臭いモノを散々嘗めさせられたもんさ・・・アンタも嘗めさせてやろうか？」

銃の先端をリングの中に挿し入れながら笑い声を上げた。

突然、シャーという音が聞こえ、異臭が漂った。

恐怖の余り、膝立ちのまま失禁してしまったのだ。

憎むべき男の突然の失禁に狂ったように笑い声を上げた。

後ろ手錠の片方だけを外すと、銃で威嚇しながら、自ら排出したモノによりビショ濡れになった床の上に仰向けに横たえさせた。

「アンタ達さっきからウンコがしたくてしょうが無いんだろ？コッチにおいで！」

腸を搔き毟る苦痛で、正常な意識も喪失し、ボンヤリと成り行きを見ていた百花と芽衣に声を掛けた。

二人は後ろ手縛りのまま、苦悶の表情を浮かべて、のろのろと傍までやって来た。

暁美は二人に横たわる緑川を挟んで互いに背中を向けるように立たせた。

そして、緑川の手を胸の前で交差させて、右手を緑川に尻を向けて左側に立つ百花の右足首に、左手を同じく右側に立つ芽衣の左足首に手錠で連結した。

「さあ！そのまま腰を降ろすんだよ！」と、二人に命じた。

暁美の言葉にまるで呪文を掛けられたように腰を降ろすと、二人の背が緑川の頭上でぶつかり、まるでアーチを掛けたように止まった。

下から見上げる恐怖に見開いた緑川の目に、二人の女の肛門が今にも決壊しそうに忙しく

収縮を繰り返しているのが映った。

「さあ、もう出しても良いんだよ・・・」

暁美の口から発せられた優しい言葉が、まるで催眠術師の暗示の様に二人の耳に響いた。固く閉じられていた秘孔が全開となり、夥しい液状物が滝のようになって降り注ぎ緑川の顔面を叩いた。

その凄惨な場面を見詰めながら狂ったように笑い上げた。

「暁美！何をしているんだ！愛美達が見つかったぞ！」

戸口に立つ青山の声で、ハッと我に返った。

青山に連れられ、部屋に入ると娘達が床に尻を着き啜り泣いていた。

傍で亜紀が懸命に娘達をあやしていた。

部屋の隅には、花和と菊田と黒川が追いやられ、黄原達から銃口を向けられ蒼白となって床に尻を着いたまま両手を上げていた。

部屋の中に散らばったバナナの皮や切カスや様々な淫具を目にして、抑えがたい怒りが込み上げて来た。

「暁美！止すんだ！」と、青山が制止したのも構わず、自動小銃の銃口を向けたまま花和達に向かって連射した。

たちまち三人はハチの巣となって、床に崩れ落ちた。

「これだけ大騒ぎをしたんだ、ぐずぐずしていると警察が来るぞ！早くここを出るんだ！」

黄原が呆然とする皆に声を掛けた。

女達には其処に在ったガウンを着せて、部屋を飛び出すと階下に向かった。

余りの事態に年若い娘達は階段を降りながら啜り泣いていた。亜紀が咽び泣く娘達を歩きながら宥めていた。

「おい、このビル変な音がしないか？」

ギシギシと建物が不気味な音を立てるのを耳にして英雄が立ち止まった。パラパラと粒の様な小片が天井から絶え間なく落ちて来ていた。

「英雄！お前が、景気良く擲弾をぶっ放すからだ！この建物は元々建築費を削った欠陥ビルの上に、何年も補修工事をしていない。そこに入口を爆破したり、何発も擲弾を爆発させたのだ！もう直ぐこのビルは崩れるぞ！」

黄原が切迫した声を上げた。

一行が出口である三階まで辿り着いた時、ヨロヨロと廊下を進む人影を見つけた。

綺囉囉だった。

綺囉囉は三階の事務所の中の自分専用にとえられた個室に居たため、無傷であったが凄惨な殴り込み現場を目にして、恐怖に竦み上がり、腰が抜けて歩くことも出来ない状態で、犬の様に四つん這いになってヨロヨロと表に這い出てきたのだった。

「おや、綺囉囉姐さんじゃないか？昔は随分とお世話になったねえ、それに今回は娘達も世話になったようじゃないか？」

憤怒の表情を浮かべて恐怖に硬直する初老の女を睨み付けた。

怯えて立つことも出来ない女の襟首を掴むと、「こっちに来るんだよ！」と、破壊しつくされた事務所の中に引きずり込んだ。

恐怖に目が裏返り、震えて声も出ない綺囉囉には抗う力は残されておらず、襟首を掴まれたままズルズルと床を引きずられた。

その異常な光景に、「止めて！ママ！」と愛美が止めようと腕を掴んだが、復讐心に支配された曉美の耳には届かず、我が娘を弾き飛ばしたのであった。

無抵抗の綺囉囉の上体を麻縄でぎっちり縛り上げると、無言のままスカートを筆を取った。

ヒッ！と羞恥より恐怖心により綺囉囉の喉から短い悲鳴が上がった。

『昔取った杵柄』とは言うけど、歳を取っても若い太股をしているねえ」

年の割に艶のある白い大腿を見詰めながら呟く様に口にした。

「おや？アンタお漏らししているじゃないか！」

恐怖のあまり失禁してしまい、ぐっしょり濡れた下着を見つけてケラケラと笑い声を上げた。

「こんな物を穿いていたら風邪をひいてしまうよしまうよ。脱がしてやるよ。」と、有無を言わさず、綺囉囉の脚から下着を抜き取った。

「おや？アンタここの毛を処理しているんだね！」

花電車の芸を良く見せるため、昔永久脱毛して、そのまま無毛の股間を見て笑った。

そこには年齢に似つかわしくない妖艶な肉の割れ目が在った。

「アンタ何年も前に引退したって話だけど、まだまだ綺麗なオ███をしているじゃ無いか！花電車の芸はまだ出来るかい？良いモノを入れて上げるから入れたり出したりして御覧！」と、口にしてダイナマイトの束を見せつけた。

今回の殴り込みに際して、色々な場面を想定して黄原が用意させておいたモノだった。

ダイナマイトを見せつけられ、恐怖に目が裏返った。

恐怖に打ち震える綺羅囉の姿を楽しむように、ダイナマイトを一本無理やり女芯に突き立てた。

「流石だね！前技も無しで、こんな太いダイナマイトがスルスル入って行くよ！もう一本ご馳走させてあげるよ？」と、もう一つのダイナマイトを手を取った。

「おやおや、とうとう三本も呑み込んでしまったよ！流石は花電車の女王だね！」

更に三本目のダイナマイトを突き立て、嬉しそうに笑い上げた。

今や綺羅囉の秘孔の筋肉はこれ以上無いほど拵がり、三本のダイナマイトを深々と呑み込んでいた。

「アンタは後ろの穴を使って芸をしたことは無いんだろ？この味も覚えてみるが良いさ！」

ダイナマイトを掴むと筒先を菊座に押し当て強引にねじ込んだ。

潤滑されていない未経験の肛口に太いダイナマイトを無理やり突き入れられ、激痛に悲鳴を上げた。

こうして体内に挿入したダイナマイトが抜け落ちない様に、縄で縛って、縄禪の様に腰に結び付け、更に左右に大腿にも縄掛けした。

「今導火線に火を点けて上げるからね！得意の花電車の技でオ●●●から出してしまわないと腹の中で爆発するよ！」と、残忍な快感に酔ったように笑い声を上げた。

火が導火線を走ってダイナマイトに近づいて来るのが目に映った。

いくら花電車の名人でも全身を縛り上げられ、縄でがっしりと縛り付けられたダイナマイトを出すことは不可能であった。

助けて！助けて！と泣き叫ぶ綺羅囉を残して、狂ったような高笑いをして後にした。

「拙い！もう警察が到着しているぞ！」

出口の階段を降りようとしていた一行の目に警察官の集団が遠巻きにビルを取り囲んでいるのが映った。

恐らく数々の爆発音を耳にした通行人が警察に通報したのであろう。警察としても事情が呑み込めぬまま、次の爆発を恐れてビルからかなりの距離をおいて配備されていた。

道路の向かい側の歩道に陣取った警察官の一人が気付いて、階段を降りて来る黄原達に、こちらに来るようにと手で合図した。

一行はどうしようもなく、ゆっくりと階段を降りると、ビルからそちらの方に向かった。

その時、綺羅の体内に埋め込まれていたダイナマイトが炸裂した。その爆発は綺羅の肢体を引き裂いただけでなく、今にも倒壊しそうだったビルに最後のトドメを与えた。

不気味な地響きと共に、ビルが上から下に向かってゆっくりと沈み始めた。

それと共に猛烈な土煙が舞い上がって、まるで煙幕を張った様に視界を塞いだ。

今だ！黄原は亜紀の手を掴んで駆け出した。娘達も亜紀の後に従い、暁美と青山も手を繋いで逃げ英雄も懸命に後を追った。

黄原達は、停めてあった車に駆け寄り、警察の目を盗んで逃走に成功した。

次の日、倒壊したビルの周りには規制線のテープが張巡らされ、現場中継の報道陣がカメラを回し、その後ろから無数の野次馬が消防や警察の作業を見守っていた。

山となった瓦礫の中から死体が担架に載せられ運び出されていた。まれに生存者が掘り出されると群衆から歓声が起こった。

「銀子・・・初めてお前と合った、あの忌まわしいビルは跡形も無く壊れてしまったよ・・・これで良かったんだろう？」

野次馬の中に交じってビルの残骸をじっと見詰める黄原が心の中で呟いた。

「やっぱり、ココに居たのかい？」

コート襟を立てソフトを目深に冠って野次馬に混じって一人佇む黄原に後ろから声を掛けられた。

振り返らなくても、それは亜紀であることは黄原には判った。

亜紀は群衆を掻き分け、進み出ると黄原の横に立った。

亜紀の方を振り向くことも無く、無言でビルの残骸を見詰める黄原に、「銀子さんの事を考えていたのかい？」と、問い掛けた。

亜紀の問い掛けにも無言で、じっと廃墟を見詰める黄原の寂しげな瞳を見ている内に、亜紀自身思ってもみなかった言葉が口を突いて出た。

「ねえ、私が銀子さんの代わりに成って上げようか？」

意外な言葉に驚いたように亜紀の方を振り返った。

しかし、もっと驚いたのは亜紀の方であった。今まで全く意識していなかった黄原への想いが突然出てしまったのだった！そして、それは意識のさらに下層の潜在意識の様なものが突然発露したのでは？と、気付いて頬が赤くなって行くのを感じた。

「お前なんか銀子の代わりに成ってたまるか・・・」

亜紀の方を見ずに視線はビルの残骸に向けたままぶっくら棒に呟いた。

「あら、ご挨拶だね！こう見えても銀子さんから鍛えられて、入れさしても嘗めさしても大したモノなんだよ！」

「そんなんじゃ無^ねえよ・・・」

まだ黄原に対して恋心を明確に意識している訳では無かったが、あっさりと拒絶されたことによって無気になった。

人込みの中にも関わらず、腕を掴んで身体を摺り寄せて来る亜紀を五月蠅^{うるき}さそうに追い払おうとする黄原の姿があった。

最後の代紋 完

<筆者あとがき>

裏切りの代紋シリーズは純愛小説か？

登場人物のキャラクターがはっきりしていれば、キャラクター自体が勝手に行動を始め、筆者は、ただそれを文字に置き換えれば良いただけ（筆力不足により旨く描写できていない点は多謝）なのであるが、書き進む内に登場人物の愛が物語の進行のキーとなっている事に筆者自身が驚かされた。

其処には男女の愛、親子の愛、女同士の愛等、色々な愛情が織り交ざっている。

傷付いた者同士の、他者を傷付け或いは殺しても成就しようとする獣じみた愛や、大事な者を懸命に守りたいとする等、様々な愛が在る。

愛する者の強さと、愛すればこそその弱さが物語に花を添えていると思います。

兎に角、長かった裏切りの代紋シリーズもこれにて完結です。

後は本篇の進行とは関係ない若干のスピニアウト小説は書いてみたいと思いますので、お楽しみと言うところです。

長い間のご愛読有難う御座いました。